

『世間娘容気』論

篠 原 進

江島其磧を剽窃の作家と呼ぶことに異論はない。いや、フランスの作家ジャン・ジュネなどとはまた違った意味で、「泥棒作家」というような形容を冠しても差し支えないとさえ思う。実際、彼は極めて攻撃的な方法でそれをなして来たし、その剽窃範圍は自分自身で告白した『野傾旅葛籠』序）西鶴にとどまらず、夜食時分から北条団水の作品に迄及んでいる。^二

しかし、当時にあつては彼の行為を批難する声はあまり聞かれなかった。つまり、「西鶴に出て、西鶴よりも又一だんあたらしき所あり」^三（『ひとりね』上・二八）という淇園の贅辞は別格としても、次の如き評価は平均的であつたといえるのではないだろうか。

戯作の才は西鶴殊に優れたり、爾後八文舎自笑、江島屋其磧、西澤一風に至りて、西鶴が筆意に効ひ、潤色して一部の趣向をたて、估客老圃の頤を解せしかば、これらもその名を噪しふせしかども、皆西鶴の二の町とやいふべからん歟（『京撰戯作者考』「井原西鶴」^四）

「西鶴の二の町」という形容の意味は必ずしも明確ではないが、言わんとするのは、其磧・一風は西鶴に及ばないということであろう。いかにも其磧は二流であつた。しかし、彼の作品が「大に世に賞美せり」（同書「江島其磧」の項）と読者に歓迎され、「其代に浄瑠璃は近松門左衛門、草紙は其磧と、人丸、赤人の如く世に賞」（『翁草』卷百六^五）されたことも事実なのである。

今日の文学史に於ける其磧への評価は高いとはいえない。その因の一つが冒頭に記した如き其磧の創作姿勢にあるということも否定できない。勿論、評価自体は誤りではないし、異議を唱えるつもりもない。ただ、当時の文芸意識を考慮するなら、多少弁護の余地も存しているような気がするのである。

柳田国男は、昔話の時代にあつては作者の創案を聴衆はむしろ「蔑しんで居た」として、「古人は古い趣向の一端を採用することを別段に悪い事とはして居なかつた」（『米倉法師』『柳田国男全集』第八卷・二九七頁）という。そして、柳田はシェークスピアの例を挙げている。同様に、外

山滋比古氏はシェークスピアが「その戯曲作品のプロットをほとんど先人の作から借用している」と断じた後、英国で版權法が制定される（一七〇三）以前の文学的共有制というような特異な時代について言及している。^六つまり、そういう時代にあつては、文学素材というのは「天下の共有物」であつて、「だれが使つてもよい」し「どこかに新味を出せばそれが手柄になる」というのである。

なるほど、其頃の時代を文学的共有制の時代とすることには問題があるし、右の例が其礎を弁護することにはならないことも確かである。しかし、少なくともそこに、現代の意識ですべてを裁断していくことへの警告を、読みとることは許されるのではないか。

つまり、其礎は衆知の話を如何に面白可笑しく書き替えるかに腐心する人であつた。聊か大袈裟な喩えを以てするなら、剽窃の縦糸に趣向の横糸を加えて織り上げられた浮世曼陀羅に鎮座して、傲然と嘯いている人であつた。

この姿勢は、先行作品の剽窃にとどまらず、際物の小説化にも踏襲される。そして『けいせい伝受紙子』（宝永七―一七二〇）や『忠臣略太平記』（正徳二）などの作品を生んできた。『略太平記』という書名に明らかな如く、二書とも赤穂義士劇を八やつしVたものである。つまり、義士劇を経とし、趣向という潤色を緯として編み上げた作品であつた。^七この、際物を八やつしVていくという方法の獲得は、彼に新しい小説世界の招来を約束したかに見えた。しかし、それは幻でしかなかった。すなわち、翌年（正徳三―一七二三・閏五月六日）には際物小説・時事小説への禁令が出されるのである。中村幸彦氏も指摘している如く、その禁令には次のような一条も添えられていた。

勿論当今有之事をやつし令板行又者狂言等ニも向後堅仕間敷候（『徳川禁令考』巻四六）^九

禁令が其礎にどの程度の打撃を与えたのか、明瞭ではない。しかし、彼の当惑ぶりは想像できるような気がする。^九時あたかも八文字屋との確執最中であつた。^{一〇}小書肆江島屋を支え、抗争で勝利を得るためには、一刻の停滞も許されない。彼には倦むことなく新しい趣向に支えられた作品を次々と発表することが要請されていたのである。そうした多少の戸惑いと方法の模索の中で、気質物が生まれて来た。

彼はそこで教訓を擬装することによって、ためになる笑話としての浮世草子を策した。それは「世間」「浮世」の描写を標榜しながら、実は彼自身の浮世観察に基づくものではなく、机上で練り上げられた文学でもあつた。^{一一}とにかく、そうして気質物シリーズの實質上の第一作である『世間子息気質』（正徳五）が世に問われ、喝采を博した。続いて其礎はそこに予告した、『世間娘容気』^{一二}（内題は『世間娘気質』。なお以下書名は適宜略称を用いる）に取りかかることになるのである。

一

『娘容気』は予定より一年半ほど遅れて、享保二年（一七二七）の仲秋、谷村清兵衛と江嶋屋市郎左衛門との相版で出版された。^{一四}この版元に谷村が加わったことと、六卷一六話で巻と章とがそれぞれ一つずつ増えたこと以外、^{一六}『子息気質』との際立った外形的变化は認められない。また、内容に於ても「唯男性を女性に變へたまで」「水谷不倒氏『新撰列傳體小説史・前編』三八一頁」という見解に代表される如く、両者の差を認めないのが一般的であった。しかし、細部に目を凝らしてみると、そこには『子息気質』とはまた異なった幾つかの特質が浮かびあがって来るのである。例えば、長谷川強氏は『娘容気』の特質として、次の四点を挙げている（『浮世草子の研究』・三六三～五頁）。（一）職業の気質よりも性癖を描くことに重点。（二）誇張の甚しさ。（三）二人物の対立（葛藤の複雑化）と、筋の逆転。四長編志向。これを総合すれば、『子息気質』に於て獲得した方法を推進させ、かつ新しい方法への模索が『娘容気』に見られるということになるうか。私も基本的には同意見である。しかし、長谷川氏の説を踏まえながら、なお細部には幾つかの特質を加えることができるのではないかと思う。以下、巻四の二を材料として具体的に考えてみよう。

まず冒頭に彼特有の戯文的アフォーリズムが配置される。^{一七}

世の中に見せまじきものハ道中の肌付金と。短気な酒の酔に脇差と。それよりわけてあぶなきものハ。若ひ後家と嫁人盛の娘の宰領に。器量^{りやう}のよい音曲^{おんぎよく}のなる手代を付て。湯治^{とうぢ}につかハすハひとへに癩^{かへそ}をとらへて。甞^{かめのを}の灸^{きう}のふたをさするやうな物でしばらくも油断^{ゆだん}のならぬものぞかし

これが、西鶴の次の文を極めて意識的に改変したものであるということとは既に述べた（拙稿『世間子息気質』論）。

油断のならぬ世の中に殊更見せまじき物は道中の肌付金酒の酔に脇指娘のきはに捨坊主（『五人女』巻四の三）

つまり、西鶴の場合、親がお七の行状を戒める際の台詞として使用されているのであるが、其蹟はこれに装飾を施し、軽妙な戯文としてマクラの役割りを担わせるのである。勿論、同種の戯文が『子息気質』（例えば巻二の二）でも用いられていたし、それ以前の作品にもないわけではなかった。^{一八}しかし、『子息気質』での実験を終え、その方法に確信を得たここでは、より磨きがかかっていることにまず注目したい。そのこと

は文の長さが何よりも顯著に物語っているであろう。

続いて、舞台となる堺の街の描写がある。風景や風俗などを描写する際、あまり心血を注がず、剽窃を用いてあっさりと済ますのは其の常套であった。彼は、早速それを実行する。

爰に泉州の堺は、ちよの松ばら万歳のうら浪しづかに、人の住なしも、おもてむきよりは内證奥ぶかにして、京にまされる楽人有、是みな唐へなげ銀して（1オ）時代もうけの分限

『好色盛衰記』巻四の一。引用は『定本西鶴全集』に拠る

次に主人公の生家高麗屋が紹介され、娘の容姿がこう描写される。

おるいとて今年十六艶顔はひとへに遠山に見初る月のごとし。髪は聲なき宿鳥にひとしく芙蓉のまなじり鶯舌のこはね。きく人五臓にこたへてたち所に氣をうしなふほどの器量。

この硬直した筆致はどうであろうか。『娘容気』が女性を主人公とする以上、その容姿に関しての素描など、作者にとっては絶好の腕の揮いどころではなかったか。しかし、ここに見る限りではあまりに類型的過ぎる。それもその筈、この部分も実は『男色大鑑』（巻二の二）を剽窃しているのである。勿論、女性描写における硬直性（ここでは剽窃）については例も多いので、後述する。

さて、そのような美形のおるいであるが、両親が娘可愛さのあまり、婿を選び好みするので、一七歳になっても縁付き先が定まらない。これで、冒頭のアフORIZムを踏まえた女主人公に関する説明が終る。そしてそこは次の如き短かなアフORIZムで結ばれる。

とかく盛立たる娘の子を。親の手前に長おきするは南風の吹時生魚たばひてくさるしてすつるがごとく。塩せぬ娘に虫がついては跡へもさきへもゆかぬものなり

ところで、この文に賦されたもう一つの役割りも忘れてはいけない。それは、これが以下「虫」として登場して来る男主人公弁七を紹介するマクラとなっていることであり、以後の話を展開する上での伏線となり、回転軸となっていることである。弁七には先掲のアフORIZムを承けた資質が付与されている。つまり、彼は「女の好る風俗（容姿）」であり、「義太夫ぶしの上手」であった。

さて、ここまでの考察で明らかになった其積の方法上の特質をとりあえず整理しておこう。(一)アフォリズムを極めて効果的に挿入し、話を分り易くしていること。(二)風景や風俗の描写を剽窃で片付けるなど、省筆の姿勢が定着してきたこと。(三)女性の描写に剽窃を用いることを含めて、類型的な、硬直した筆致がうかがわれること、などである。

二

弁七は、縁あって高麗屋の日待に呼ばれ、音曲の巧みさを披露することとなる。そして、彼の美声に接したおるい。を夢中にさせるのである。彼女の恋慕ぶりを形容するに際して、再び剽窃が用いられる。

おなつ清十郎に思ひつきそれより明暮心をつくし魂身のうちをはなれ清十郎が懐に入て我は現が物いふごとく春の花も闇となし秋の月を昼となし雪の曙も白くは見えず夕されの時鳥も耳に入ず盆も正月もわきまへず後は我を覚ずして恥は日よりあらはれいたづらは言葉にしれ

『好色五人女』巻一の二

おるい。思ひつきそれから明暮心をつくし。魂身のうちをはなれ。弁七が懐に入て我は現が物いふごとく。春の花を闇となし秋の月を昼となし。雪の曙もしろくは見へず。夕ざれの時鳥も耳に入ず。盆も正月もわきまへず。後は我をおぼへずして恥は日よりあらはれ。いたづらは言葉にしれて

傍点部程度の差であるから、ほとんど同じと見て間違いない。四季の風物を配して、お夏の心を巧みに叙した右の文は、『五人女』の中でも特に秀れた部分なので、当時の読者も剽窃に気づいたかも知れない。あるいは、弁七の設定が清十郎の境遇と似ていることから、気の早い者は両話をオーバーラップさせ、以後の展開を予測さえしたかも知れない。しかし、其積は頓着しない。その後は全く独自の展開を見せるのである。つまり、『五人女』ではお夏と清十郎とが結ばれるために、「花見の場」が設定され、聊か滑稽な濡れ場が描かれているのであるが、こちらは、そんな「場」の設定はせず、次の如く説明的に記述される。

弁七(びんしち)胴(たう)をすへて闇(やみ)になる夜を待て裏(うら)の高塀(たかべい)を越(こ)す。身をすてゝかよへは娘(むすめ)も恋(こひ)より大膽(だいだん)になつて。猿戸(さるど)の鎗(やぶ)をぬすみ出し。人(ひと)しれず我(わが)寢間(ねま)に引入(いれ)ふたりが命(いのち)をかけて二世迄(にせいた)かはるな(な)は(9オ)らじと互(たがひ)に小指(こゆび)を喰切(くぐち)。其血(ち)ひとつに絞(しぼ)り出し。娘(むすめ)は男(おとこ)の肌着(はだかぎ)に暫紙(しばし)をかけは。男(おとこ)は女(め)の下着(したぎ)にかきかはして。

と。いかにも、ここに描かれた行為は激しい。特に後半部は、遊女の心中立を彷彿させるほどである。しかし、この表現すらも既に指摘の通り、一皮むけば『武道伝来記』(巻二の一)の剽窃となつてゐるのである。ここで興味深いのは、其磧(そのがき)が二人の交情を描くに際して、先述の『五人女』(花見の場)を借りなかつたことである。参考として左に掲げてみる。

清十郎(せいじゅうろう)おなつばかり残りおはしけるにこゝろを付、松むら／＼としげき後道(ごみち)よりまはりければ おなつまねきて結髪(むすかみ)のほどくるもかまはず物(もの)もいはず兩人鼻息(はないき)せはしく胸(むね)ばかりおどらして(巻一の一)

両者の違いを一言で言うなら、臨場感である。或いは、リアリティーと言ってもよいであらうか。つまり、後者は「松むら／＼としげき」という表現に象徴される清十郎の激情の溶岩が、「結髪(むすかみ)のほどくるもかまはず」というお夏の熱情の海へと注ぎ込み、交感するといった場面が一つの「現在」として追われ、秀れた表現効果を醸(か)してゐるのである。好色物の濡れ場に於けるリアリティーとは、好色味の濃さを意味する。其磧(そのがき)はこの好色味の濃い表現を採らなかつた。勿論、執筆の時点に於ける其磧(そのがき)の選択肢は極めて多様であつたし、引き続いて『五人女』を剽窃する必要などなかつたと思う。しかし、逆に言えば剽窃してもよかつた筈である。少なくとも、選択肢の一つとしては存在していた筈である。したがつて、其磧(そのがき)がここでより無難な穏やかな選択をした、ということくらいは言えるのではないだろうか。

さて、二人は仲を深め、おるゐは妊娠(ごんご)する。そこへ、難題(なんだい)がふりかかる。つまり、おるゐには塵人(ちんじん)という婿(むこ)が、弁七(びんしち)には母の姪(めい)が勘当(かんたう)を許し母屋(ははや)を渡すという条件で押しつけられるのである。経緯(きわい)を打ち明けた後、二人の間には次のような会話が交される。

「勘当(かんたう)をゆるさるゝはうれしひとひながら。そなたと別れ思(わかれおも)はぬ女房(にようばう)をもたふかと思へは。胸算用(むすえんよう)ちがふてさらに故郷(こきやう)へ帰(かへ)る心底(しんてい)みぢんもなし。何(なん)とそなたは我(わが)と縁(えん)をきり明日(あす)にも親(おほせ)の仰(おほせ)にまかせ。いづ方(かた)へも嫁入(よめいり)する心底(しんてい)か」(中略)ととへは。「我身(わがみ)はなをさら(たづ)ならぬ身祝言(みしげご)もちかづくよし。逆(さか)も生(い)てはゐられぬ所(ところ)。今夜(こゝろ)何方(いづか)へも立(た)のき。もろ共野辺(のべ)の露(つゆ)ときへたきねがひ」

多少上滑り気味であるが、(1)主人公達が葛藤する状況の発生、(2)葛藤、(3)互いの心の確認、(4)愁嘆、と一通りのプロセスを経て、これもお定

まりの道行へと二人は出かけようとする。場面は緊張し、心中物浄瑠璃のタッチで話は展開するかに見える。しかし、緊張は長続きしない。

しからは今宵こよ是よりすぐに立のくべしと。此世このよの名残なごりにしばし枕まくらかはして

『曾根崎心中』に於ける八道行Ⅴのあまりにも有名な詞章「此世の名残」と受けて、悲曲に乗り極楽への道行の第一歩を踏み出そうとした瞬間、二人はズッコケル。緊張の糸はすぐ切れてしまう。彼らは禁欲状態を保持できないのである。つまり、禁欲的で緊張しているがゆえに美しい恋の逃避行が、交情のために飽食・弛緩してしまい、気怠い歩行へと変貌を遂げるのである。この場面を境として、ストーリー展開に其磧の独自性が日立って来る。すなわち、滑稽咄としての様相を呈しはじめるのである。原因は、おるゐが血脈を忘れたことにある。そのため彼女を近くの藁葺小屋に残して、弁七は店に戻るのであるが、そこに老母を背負った小野の油屋が夜逃げして来る。彼は雪に妨げられて進むことができず、同じ小屋に母親を残して等を借りに出る。そして、等を調達して戻り、間違っておるゐを背負って去ってしまう。そのあとに戻った弁七は老婆をおるゐおるゐと思い心中するのである。その心中を評して次の如くいう。

思ひもよらぬさいごの有さま男は廿二おばゝは九十一。ためしなき心中と夜明よあけての評判ひやうはん。さぞや来世で胸算用むねざんようがちかふて。年寄女房としよりにもてあつかふへしと知た程しりのものは手をたゝいて笑ひぬ

曾て其磧は『風流曲三味線』（巻三の二）（宝永三）に於て、八八歳の親仁と一四歳の娘との心中咄を書こうとしたことがあった。結果は未遂であったが、その時の狙いは、極端な取り合わせと、誇張によるユーモアの醸成であったと思う。ここでも九一歳という年齢の婆を取り合わせることによって、弁七の心中を矮小化し、滑稽化してしまっているのである。つまり、同じ心中でも「廿二歳と九一歳」というコンビでは、同情よりも滑稽が先立ってしまうのである。そのことは、「手をたゝいて笑ひぬ」と添えることで確認されるし、笑いは弁七の母親の恨み言によって増幅さえされている。

なお、おるゐはその後、弁七方に引き取られ安産し、油屋を後見として北浜の米問屋へ縁付き、一人の子供を生んで八八歳まで生きたという。幾分蛇足気味であるが、この記述によって悲劇的モチーフは完全に中和化されるのである。

三

以上、多少煩瑣であったが、『娘容気』のストーリーを追いつながら、そこで用いられている方法を考えてみた。再度整理してみると、第一節で示した三つの他に、次の三つが付加できるかも知れない。④先行作品からストーリーを借用する際、新味を加える工夫をしていること。⑤演劇的趣向を導入していること。⑥滑稽感を醸成するために腐心する様子が際立っていること。これらを総合するなら、自分に関心のない部分は徹底的に省筆（この場合、刪削で間に合わせることも含む）しながら、勝負どころと考える部分では、新奇の趣向を導入して話を面白くすることなど、自己の才を傾注すべく大いに気を配っているということになろうか。

ところで、この特殊性は一般化できるだろうか。つまり、巻四の二から帰納した六つの特質を『娘容気』の特質、ひいては成熟期に於ける其碩的方法的特質と考えてよいかどうかである。六つの点を中心として視点を広げてみよう。

第一点。アフォリズムの使用と、話への導入について。この場合アフォリズムを第一節に示した如き戯文的アフォリズムに限定せず、本来の意味の警句と考えるなら、『娘容気』に限らず、『子息気質』・『親仁形氣』共に頻出する。しかし、厳密に見れば三者には差がある。簡単に言うなら、『娘容気』での教訓は分り易く、話においても全体の筋が理解し易いのである。その差を生じさせるポイントは、警句や諺を提示した後、具体的な話へ入る際の起語にある。少し数字を挙げてみる。

つまり、『娘容気』には警句のあと「爰に」という言葉で一呼吸おいてから、話へと導入していく例が六例（巻一の一・一・二・二の一・二・三・四の二・六の一）数えられる。また、近似した例として四例（巻一の三・二・三の一・五の一）を加えることができるので、一六話中一〇話となる（なお、巻三の二・四の三は警句があるが、話への導入部分は画然としない）。逆に言うなら、冒頭に警句を掲げずにいきなり話に入っていく例は四話（巻三の三・四の一・五の二・六の二）しかないのである。

これに対して、『子息気質』の場合「爰に」で導入する例が三例（巻一の一・二・二・四の二）で、「是」など近似の例が二例（巻一の二・五の三）であって、いきなり話に入っていく例は逆に九話（巻一の三・二の一・二の三・三の一・三の三・四の一・四の三・五の一・五の二）に上っていた。^{三二}こ

の数字はそのまま、『子息気質』の読み難さとなってあらわれている。つまり『娘容気』では、冒頭の警句・諺などによる教訓的部分と、具体的な話の部分との線引きが明瞭になってきており、理解し易くなったといえるのではないだろうか。

同じことを『親仁形気』でみる。ここでは、いきなり話に入っていく例が三話（巻二の三・四の二・四の三）と少ないかわりに、「爰に」という起語を使う例も二話（巻四の一・五の一・二）と少なくなっている。その代りに、「近似した例」と先に掲げた型が多くなっている（残り全部）。これは、警句的部分と話の部分との分離を物語ると同時に、話へ導入する際の起語に、工夫が凝らされていることも伝えているのではないだろうか。

以上の数字から、『娘』は『子息』よりも叙述の態度が型に嵌ってきていると言えるし、『親仁』にはその枠からはみ出そうとする姿勢が見られると言えらると思う。言葉を変えるなら、『子息』では曖昧であった創作態度が、ここで明確になってきたということではないだろうか。勿論、『子息』でも「孝にすゝむる一助ならんかし」（序）と、一応の教訓的ポーズを取ってはいる。しかし、あくまでポーズでしかないこと、少なくとも空回りしていることは既に述べた。それが『娘容気』で板につきはじめたということである。つまり、教訓の擬勢が本物になりかけているということである。ただし、そこで繰り返される教訓的言辞の出処を質せば、ほとんどが剽窃か、諺である。それゆえ、その言辞に其積の女性観や物の考え方を見ようとすると、誤謬を招くことになるだろう。擬勢はあくまでも擬勢なのである。ただ、その教訓的擬勢のとり方が巧妙になってきたとは言えると思う。

第二点。風景や風俗を描写する際に剽窃を多用する姿勢は、『子息気質』や『親仁形気』にも共通して見られる。例えば、先に『娘容気』（巻四の二）に於ける堺の描写が剽窃に拠っていることを示したが、同じ部分が『親仁形気』（巻三の二）で再度、使用されていることを挙げよう。更に、『子息気質』（巻四の二）では、大坂を描写するにあたり『日本永代蔵』（巻一の三）を剽窃しているが、『親仁形気』（巻二の一）で大坂を描く際、再び同部分を剽窃していることなど枚挙に暇がない。

第三点。女性の描写に硬直した筆致が見られるということ。例を挙げてみよう。

- (ア) ① 室町の呉服屋の秘蔵子。きりやうすぐれて見る物魂をうしなひ（巻一の二）
② 三十二相打そろふたる美人（同）

- (イ) 内儀はやごとなき御方の殖し子にてならびなき美人(巻一の二)
- (ウ) おつやとて嫁入盛の美形の娘(巻二の二)
- (ニ) あたりもかゝやくばかりの娘(巻三の二)
- (ホ) 都にも稀なる器量(巻三の三)

(カ) おむめとて今年十五の月の顔花の容又ならびなく(巻四の一)

(キ) 有徳人の息女。美形當流の釣嶋田。針がね入のヒ髻かしらから常の仕出しに替り。光琳もやうに手をこめ。紅のかくし裏はのかに十三がはりの寄嶋帯。おまん様むすびもよしや花車づくしの抱帯。くれなゐの二重內衣氣をつけてよき上をかく作れはすくれて目にたち所から難波のよしあしいふ患口中間の若い者も魂をともしぬ(巻二の三)

これが『娘容気』の主人公達の容姿の描写である。器量が良いといい、美人(美形)といい、「あたりもかゝやくばかり」といったところで、彼女達のイメージが彷彿としてこないことは否定できないだろう。つまり、そこには個性というものがないのである。典型的なのは(カ)の例であろう。正に型に嵌った美文なのである。なるほど、(キ)の描写は細かい。しかし、詳しく観察してみるなら、これが『嵐無常物語』(下巻の一)からの剽窃だということに気付く筈である。ところで、第二節で示した『五人女』(花見の場)や(キ)の表現に明らかな如く、近世前期の小説史に於ける西鶴の特異性は、その描写力にあったと思う。彼は(一品の描いた肖像画に見られる)あの鋭い目で人々や浮世を観察し、それらを個として描いていった。それゆえ、描かれたものには西鶴なりのリアリティーがあった。しかし、彼が没してから四半世紀ほど経たこの『娘容気』に見られる(カ)から(ニ)までの描写ぶりはどうであろうか。あたかも、西鶴以前の小説に逆戻りした如き筆致である。そこには、個はなく、極めて一般化された匿名の人々の姿が「咄」として突き放して描かれているのである。それは、名前や舞台の固定化という形で典型的にあらわれてくる。主人公は「美しさにかがやく」おつや(『娘』巻二の二・『親仁』巻四の二)であり、大坂では長堀の材木屋(『軍配団』巻二の一・『子息』巻四の二『娘』巻二の三)がよく出て、江戸では白銀町(『軍配団』巻四の一・『子息』同・『娘』同・『親仁』巻四の三)や伝馬町(『子息』巻三の一・巻四の二)がよく使われる。主人公は浅草観音の縁日か上野の花見で見染められ(『娘』巻二の一・四の一・五の一)、没落した者は金棺に住む(『軍配団』巻四の一・『子息』巻三の一)。これをリアリティーの喪失とでも言ったらよいであろうか。しかし、其積の目指したものを斟酌した場合、必ずしもそれ

が退歩であり瑕瑾であるとは断じられないのである。このことに関しては、次の節でもう一度触れる。

第四点。先行作品からストーリーを借用する際、新味を加える工夫をしていること。この傾向は『子息』よりも『娘』に顕著である。典型的な例がある。それは丸取りをした時の処理の仕方である。『子息』が丸取りをしているのは二つ。巻四の三と巻五の二。前者は『懷硯』（巻二の一）を、後者は『好色敗毒散』（巻四の一）をほとんどそのまま用いている。その点『娘容気』（巻五の二）は少し趣を異にする。つまり、『二十不孝』（巻五の一）の大筋を丸取りをしてはいても、その後加筆をして、追放された妹の転落ぶりに焦点をあてて書き込んでいくのである。この姿勢は、後に『商人家職訓』（巻二の一）（享保七）で同部分から再度ストーリーを借用する際、その親不孝咄を親孝行咄に逆転させてしまふなど、ますます目立って来る。そのことも既に書いた。似た例が、相撲好きの男を主人公とした『二十不孝』（巻五の三）と、『子息気質』（巻二の三）・『親仁形気』（巻一の二）の間にも見られる。^{二五}内容に立ち入ると煩瑣になるので、そこに用いられている言葉で代用することを了承されたい。

○四十八手にはねを碎き。片輪になる事もいとわず 『二十不孝』（巻五の三）

○四十八手の外を工夫し、大名の金は済^すまうが済^すまいが、相撲にさえ勝てばよいと 『子息気質』（巻二の三）

○昔は相撲に四十八手と申せども、今程はさまざまの新法の手をあみだて、凡八十八手覚ぬいたる此男 『親仁形気』（巻一の二）

傍点部の加筆は、彼が一話ごとに誇張を加えていく姿勢を象徴してはいないだろうか。

第五点。演劇的趣向の導入ということ。この点も、『娘容気』に限らず、其磧の作品全般に言えることである。それは既に『曲三味線』（宝永三・一七〇六）に顕著であった。また、後には劇中劇というべき『役者色仕組』（享保五）のような作品も出るし、享保期はそれこそ歌舞伎や浄瑠璃の翻案、つまりへやつしゝ物の全盛期でもあった。其磧は『国姓爺合戦』（正徳五初演）をへやつしゝて『国姓爺明朝太平記』（享保二・五）を書くが、その残滓が『娘容気』にも見られることを長谷川強氏が指摘している。^{二六}それゆえ演劇的手法をここで逐一数えるのも無意味と思われるので、一例のみ示す。（巻六の一）困窮した女主人公おとわが、角平と談合して美人局を企てる。つまり、長持の中に角平を忍ばせておき、紙屋の息子を誘惑するのであるが、おとわはこの古い趣向に気付かれ、この息子に乗り換えてしまう。その際、長持に錠をおろし角平を閉じ籠

めて逃げる。この趣向は、『世継曾我』（天和三）に於て虎少将が荒四郎・藤太という敵を閉じ籠めるのに用いられたものであった。

第六点。滑稽感を醸成する工夫。この例も多い。甚しい誇張で笑いを醸す、巻一の一・二の三・三の一・五の二など典型的である。また巻二の二では、衣類を総て質入れして役者に付届けをした女房が出る。亭主はこれを自分で働いて請け戻すよう命ずるが、その職種を何でもよいとする中で「真尋うむ事は無用」（問男をすることの隠語）と注文をつけるオチなど、軽妙で洒落ている。

四

最後にまとめの意味で、テーマに対する意識や創作姿勢について考えよう。彼は（序）で次の如くいう。

すべて女の道といふは。かならずしも才智人に勝れたるをいふにあら（序オ）ず。貞節の心を専にして。姦乱なる心を退世帯がたに心を籠て夫によくつかゆるをいへり

そして、反面教師としての「女」（序）達を描き出すことに、ある程度成功した。ただ問題なのは、その際素材をどう処理し、素材に対してどのような意識を持っていたかである。

再び巻四の二の例に立ち戻る。そこで犠牲となった九一歳の老婆。その死を私は滑稽と評した。しかし、翻って考えてみるなら油屋側にとってこの上ない不幸はないのではないか。間違つて心中の片割れにされ、殺されながら、それが皆に「手をたゝいて」笑われるなどということとは、それこそ耐えられないことだったのではないだろうか。老婆にとっては悲劇そのものだったのではないだろうか。こんな抗議が出ても確かにおかしくはない。しかし、実際は読者からそんな文句が出る筈はなかった。私のような疑問は野暮なのである。其積は読者に深読みを要求してはいない。ましてや、深刻に読まれることなど思惑の遙か外にあるのである。彼の期待は、繰り返し述べてきた如く「幾分ためになる」笑話として読者に受けとめられることだったのである。

この其積の楽天的ともいえる創作姿勢は、ある意味において、彼と同時代の浮世草子作家に共通のものであった。例えば「近親相姦」というテーマ^{二七}。西沢一風は『御前義経記』（巻八の四）（元禄一三）で今義と小ざつまという男女の間でそれに触れながら、極めて巧妙に逃げ、それを

「悪僧の魂」の所業として処理した。夜食時分に至っては、父と娘とを契らせても逃げすらしい『好色敗毒散』（巻一の二）（元禄一六）。姉女郎の次の言葉で納得し、笑い咄として不問に付してしまっているのである。

今までちやとて親御様の厭がらんす事をさしましたではなし、廿四孝もしのこしておいた孝行ぞかし

これを「あのねこも兄弟かァうら山しい。おとゝひふうふとちぎりても。人もとがめずそしられぬ。ねこに成たい／＼」（第三段）と懊悩する造酒之進・清滝兄妹（近松『津国夫妻池』（享保六初演）・実は兄妹ではない）と対置してみるなら、前二者の楽天ぶりが明瞭となるであろう。

その因は、ジャンルや時代など多面的に考慮しなくてはならないであろう。また、深刻さや真面目さに欠けることがそのままりアティイーの喪失につながるのも思っていない。しかし、「近松は此草紙を書く事難く、其碩は又淨瑠璃を作り得ず、適々淨るりを書けば趣向は面白けれども、人形働らかざりしなり」（『翁草』巻五五）と言われる如く、其碩の趣向本位という創作姿勢が、彼自身の資質に起因するものであること、更には当時の浮世草子作家に、ある程度共通するものであったということは明瞭であると思う。

さて、以上の如き特質や瑕瑾を孕みながら、『娘容気』は如何なる存在意義を有しているのだろうか。再び近世に於ける評価を掲げてみる。

(一) 貝原先生の大和俗訓、家道訓ハむく／＼和／＼として極上々の能化談義、自笑、其蹟が娘形氣。息子形氣は、表に風流の花をかざり、裏に異見の実を含、見るに倦ず聞に飽ず是を當世上手の所化談義に比すべし（『當世下手談義』序）（傍点筆者以下同じ）

(二) 中本といふは、洒落本に似て非なる物にて、明和の頃、風来山人が著したる六部集（略）を始め、一九が膝栗毛、瀧亭鯉丈が八笑人三馬が浮世床浮世風呂、京伝が腹筋鵬武石の類なり、是は京撰には古くより八文字舎自笑、江島其碩が作の親父氣質、娘氣質の類の一変したる物といふべし（『国字小説通』『洒落本中本評判記差別』）

(一)は『娘形氣』に談義的傾向を見る説、(二)は滑稽本の先驅として位置付ける説である。その当否に関しては、綿密な検討が必要であると思うが、少なくとも『娘容気』がそんな読まれ方をされていたことは注目してよいと思う。つまり其碩の真意はともかく、笑いと教訓性とを読者が見ていたということであり、更にはそこで示された趣向本位の姿勢が後期戯作の中に蘇って来るといのである。戯作の性格及びその表現について総合的に論じたものとしては、中村幸彦氏の名著『戯作論』（角川書店）がある。それを「趣向論」と断じたのは丸谷才一氏であった（八書評Ⅴ「文学」昭和四二年・三月号）。勿論、『娘容気』に用いられた趣向と後期戯作のそれとの関連性についても、具体的な例を挙げての詳細な検

討を必要とする。そこで、とりあえず、『娘容気』の精神に、戯作の精神と繋がるものがあるか否かを考えておくにとどめる。

例えば、パロディー・風刺の問題。井上ひさし氏はパロディーを定義して「正確に歪んだ鏡」『パロディー思案』『パロディー志願』（中央公論社）所収』と言い、A・ビアスは「諷刺の精髓は機知である」『悪魔の辞典』と言っている。学問的定義は別として、言い得て妙であると思う。

ここで気になるのは、当時の女訓物の出版状況である。何故なら、曾て『本朝二十不孝』（貞享三）がそうであったように、^{三〇}『娘容気』の中に女訓物流行のパロディーを見ることができないかと思うからである。しかし結論を先に述べるなら、ないものねだりのようである。なるほど、享保元年八月に「女大学もの」の始祖であり原型というべき『女大学宝箱』が出されている。また、その版元の一人小川彦九郎は江戸に於ける其碩作品の有力な売り捌き元でもあった（『享保以後江戸出版書目』）。以上のことを考えるなら、両者の関係は無視できない。しかし、その流行普及は少し遅れるようでもあり（石川松太郎氏『女大学集』（東洋文庫）（解説）、『娘容気』に女訓物流行のパロディーを見るためには一年という期間が聊か近接仕過ぎているようである。ただし、『娘容気』が誇張という形で浮世を歪めて描き、滑稽を以てそれに装飾を施し、機知で整理編集した作品であるという点で、戯作精神と繋がるものがある、とは言えるかも知れない。この点に関しては、稿を改めたい。

後掲の年譜に示す如く、『娘容気』は自笑との確執時代の掉尾を飾る作品となった。これ以降、其碩は享保二〇年七〇歳で没するまでの一八年間に、約五十六編の浮世草子を述作することになる。この数は彼の著作と考えられる浮世草子約八〇編の、およそ三分の二に該当する。しかし、その数の多さにも拘わらず、方法的労苦は『娘容気』以前に比して遙かに少なかったような気がする。何故なら、以後の作品は『娘容気』迄に獲得した方法を適宜アレンジして用いればよかったからである。

註

- 一 拙稿『「世間子息気質」論』（弘前学院大学紀要・第一五号）参照。
- 二 註一の拙稿では団水の作品との関係については言及しなかったが、『子息気質』（巻五の三）に於ける占法が、『一夜船』（巻五の五）（正徳二）「かくれもなき調子聞」に拠っていることは確実である。なお、『一夜船』は団水が補筆編纂した書であろうとの考証がある（宗政五十緒氏「北条団水年譜」『西鶴の研究』所収）。
- 三 引用・番号とも『近世随想集』（日本古典文学大系）（岩波書店）所収本に拠る。
- 四 引用は『続燕石十種』所収本に拠る。

- 五 引用は『日本随筆大成』（第三期）所収本に拠る。
- 六 NHK大学講座「文学—文学と社会—」（一九七七年・放送用テキスト）（一頁から一三頁）。
- 七 『けいせい伝受紙子』の方法については、拙稿『「傳受紙子」臆断譜』（青山語文）（第六号）』参照。
- 八 中村幸彦氏「自笑其磻確執時代」『近世小説史の研究』（桜楓社）所収（二〇九頁）。なお、氏はそこで明和八年の京都書林仲間の禁書目録（絶板の部）に其磻の『略太平記』の名があることを確認されている。
- 九 勿論禁令の出されたことが際物小説の廃絶に直結するわけではない。実際、当時の浮世草子を見ても大奥のスクヤンダル江嶋・生嶋事件に取材したと思われる『今源氏空船』や『西鶴伝授車』（享保元）などが出されている。但し、そのことと其磻自身の自主規制の問題とは別に考えなくてはならないであろう。
- 一〇 「略年譜」参照。
- 一一 註一の拙稿参照。
- 一二 気質という名称にのみ拘泥するなら、第一作として『寛瀬役者片気』（宝永七または正徳元）を挙げなくてはならないであろう。
- 一三 常識的には内題を以て正式書名とすべきであるが、この表記が従来用いられてきたこと、また其磻自身既刊広告『和漢遊女容気』（享保三・正月）付載の中で『容気』と記していることなどから、この表記を採ることとする。
- 一四 『子息気質』付載の予告（江嶋屋版を翻刻した『世間子息気質』（野田壽雄先生・篠原進編）（武蔵野書院）参照）には「世間娘気質 全部五巻」として次の如くある。
「右は来申ノ正月（筆者註・正徳六年）二日未本出し候間御求御らん可被下候」。
- 一五 長谷川強氏「八文字屋本年表」（『近世国文学—研究と資料—』所収）に指摘がある如く、現存本は「谷村清兵衛」版が多いが、管見によれば、東京大学附属図書館所蔵本には次の如くある。「寺町谷村清兵衛板／四条繩手江島屋市郎左衛門」。
- 一六 管見によれば、享保二年五月刊の『国姓爺明朝太平記』（所見本は天理図書館所蔵本）付載の予告には次の如くある。
「世間娘気質／全部五巻／右之本近日出来仕候間御求御覧可被下候」
- 一七 と。これで明らかなのは、『娘容気』が正徳五年の予告以来、刊行の三四ヶ月ほど前迄は『娘気質』『五巻』として構想されていたということである。彼のアフォリズム集『絵本答話鑑』（享保一四）から似た表現を探すと次のようなものが見つかる。
「上戸に酒の間さすと色盛の娘の子にきりやうのよい若き手代をつけて（3ウ）しばゐ見せにやるハ頼にかめのおの灸のふたさするやうでゆだんのならぬ物ぞかし」。
- 一八 例えば『野傾旅葛籠』（巻五の三）（正徳二）、『丹波太郎物語』（巻三の七）（正徳五）など。
- 一九 この剽窃に関しては滝田貞治氏『西鶴の書誌学的研究』（野田書房）の指摘が既にある。
- 二〇 註一九に同じ。

- 二一 次の如くレトリックを用いての導入も「爰に」という起語を用いるのと同じ効果を生じていると考えられる。
- 〇「をのれが智恵の曇りを磨ぬ鏡屋の愚平次とて」(巻一の三)。
- 〇「是身上善悪の堺町に材木屋の空兵衛とて」(巻二の二)。
- 〇「こゝが分別の堺筋に、近年商物に利のまはりのよい木葉屋道斎」(巻三の一)。
- 〇「見せかけ珠数の玉にもぬける柳原のあたりに米屋の俵左衛門後家とて」(巻五の一)。
- 二三 巻三の二は画然としない。
- 二四 拙稿(註一に同じ)参照。
- 二五 長谷川強氏(『浮世草子の研究』三六五～六頁)は同部分が『野傾旅葛籠』(巻三の三)(正徳二)にも利用されていることを指摘している。
- 二六 註二五に同じ。
- 二七 野口武彦氏「近親相姦と文学的想像力」(『江戸文林切絵図』所収)(冬樹社)に、この点に関して興味深い考察がある。
- 二八 引用は野田壽雄先生校註「當世下手談義・教訓續下手談義」(桜楓社)に拠る。
- 二九 引用は『続燕石十種』(第一)所収本に拠る。
- 三〇 野間光辰氏「西鶴と西鶴以後」(『岩波講座日本文学史』)。勿論こういう読み方に対しての反論もある。
- ① 横山重・小野晋氏『本朝二十不孝』(解説)(岩波文庫)。
- ② 谷脇理史氏「本朝二十不孝」論序説(『国文学研究』三六号・昭和四二年一〇月)。

江島 其 磧 略 年 譜 (未定稿)

(天皇 將軍)	和 暦		西 暦	年 齡	記 事 (浮世草子作品)	そ の 他 の 作 品	備 考
	寛文六	一六六					
東山 (綱吉)	元禄七	一六四	29	1	・ 京都万里小路通槌屋町に大仏餅屋・三代目村瀬庄左衛門の第三子として誕生。 通称、村瀬権之丞(村瀬家系譜)。	△さよの中山▽(浄) △万歳五色松▽(浄) △いふき山▽(浄)	・ 3『西鶴藏留』7『好色万金丹』(時分) ・ 10芭蕉歿

・ このころ松本治太夫に浄瑠璃の作を書き与える(役者目利講)。

東山 (綱吉)	元禄八	六五	六	三十一	三十二	三十三	三十四	三五	三六	三七	三八	三九	四〇	四一	四二	四三	四四	四五	四六	中御門 (家宣)	庚寅
・家督を継ぎ、 四代目庄左衛門を襲う。	30	六五	六	三十一	三十二	三十三	三十四	三五	三六	三七	三八	三九	四〇	四一	四二	四三	四四	四五	四六	己丑	庚寅

(乙未) 五	(甲午) 四	(癸巳) 三	(壬辰) 二	(正徳元 辛卯)	(中御門 家宣)
二五	二四	二三	三	二七	
50	49	48	47	46	
秋『世間子息気質』(刊は冬?) (五) (〇) (江)	1『丹波太郎物語』(三) (〇) (江) 。この頃迄に江嶋屋は「六角通柳馬場角」から、「四条おたび町」に移転(子息気質・刊記) 『豆右衛門女男色遊』(五) (●) (谷) 後日 。2大仏餅の家督を永楽屋治右衛門に譲り、入道して宋栄と名乗る。 『通俗諸分床軍談』(五) (●) (谷) (江)	1『今川当世状』(六) (●) (谷) 1『当世御伽曾我』(五) (●) (八) 2『風流東鑑』(五) (●) (八) 『通俗諸分床軍談』(五) (●) (谷) (江)	1『野傾旅葛籠』(五) (〇) (江) 1『魂膽色遊懷男』(五) (△) (江) 『忠臣略太平記』(六) (▲) (江) 冬『商人軍配団』(五) (●) (江) 1『渡世商軍談』(五) (●) (江)	閏8『けいせい伝受紙子』(五) (●) (八) 2『宝永八』『色ひいな形』(五) (●) (八) 4『宝永八』『傾城禁短気』(六) (●) (八) 11『寛潤役者片気』(二) (△) (江) 『傾野衆分情ひいな形』(五) (▲) (八)	惣領市郎左衛門名儀で八幡町通室町西へ入ル町に江島屋開業(万年草朝露・予告他)。
	1『役者返魂香』(評) (〇) (江) 1『風流おはぐろ親』(絵)		「手管仕様帳」(一) (▲) (江)		
11 4 ※1正徳新令。 『艶道通鑑』(残口) 『国性爺合戦』(近松)	※3絵島・生島事件。 8益軒歿。 9竹本筑後掾(義太夫)歿。	1『日本新永代蔵』(団水) ※4家継が將軍となる。 ※5際物・時事小説への禁令。	※9勘定奉行萩原重秀罷免。※10家宣歿。	3・1団水歿。 3『冥途の飛脚』(近松) ※四月二五日改元。	

中御門 (吉宗)	享保元 (丙申)	享保二 (丁酉)	享保三 (戊戌)	享保四 (己亥)	享保五 (庚子)	享保六 (辛丑)	享保七 (壬寅)	享保八 (癸卯)
一七六	七	五二	五三	五四	五五	五六	五七	五八
三	三	三	三	三	三	三	三	三
58	57	56	53	54	55	56	57	58
1 この頃、江島屋解散。末子源吉(其跡)とともに、	1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『女曾我兄弟鑑』(五)(〇)(八)(江)	3 『日本契情始』(五)(〇)(江)(八)	1 『商人職訓』(五)(〇)(谷)	1 『芝居万人葛』(五)(△)(江か)	1 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)
1 『役者春空酒』(評)(〇)(江)	3 『役者補振舞』(評)(〇)(江)	1 『役者職敵』(評)(〇)(江)(他)	1 『役者金化粧』(評)(〇)(江)	3 『役者五重相伝』(評)(〇)(江)	1 『役者三蓋笠』(評)(〇)(江)	2 『役者三名物』(評)(〇)(江)	12 『役者小評判』(評)(△)(江)	1 『女曾我兄弟鑑』(五)(〇)(八)(江)
1 『正徳六』(役者我身宝) (評)(〇)(江)	1 『けいせい錦産衣』(狂)(江)(他)	1 『役者賭双六』(評)(〇)(江)(他)	1 『傾白御前追従』(江)	1 『役者職敵』(評)(〇)(江)(他)	1 『けいせい千人枕』(狂)(江)	1 『なこや山三上臈雛』(狂)(江)	冬 『けいせい山榊太夫』(狂)(江)	1 『武道近江八景』(五)(△)(谷)(鶴)(菊)
1 『義経倭軍談』(六)(〇)(鶴)(谷)(菊)	1 『花実義経記』(六)(〇)(菊)(他)	1 『楠三代壮士』(五)(〇)(八)(江)	1 『浮世親仁形氣』(五)(〇)(八)(江)	1 『風流宇治頼政』(五)(〇)(八)(江)	3 『役者色仕組』(五)(〇)(八)(江)	1 『女曾我兄弟鑑』(五)(〇)(八)(江)	3 『日本契情始』(五)(〇)(江)(八)	1 『商人職訓』(五)(〇)(谷)
1 『芝居万人葛』(五)(△)(江か)	1 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『女曾我兄弟鑑』(五)(〇)(八)(江)	3 『日本契情始』(五)(〇)(江)(八)	1 『商人職訓』(五)(〇)(谷)	1 『芝居万人葛』(五)(△)(江か)	1 『風流七小町』(五)(〇)(八)
1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『女曾我兄弟鑑』(五)(〇)(八)(江)	3 『日本契情始』(五)(〇)(江)(八)	1 『商人職訓』(五)(〇)(谷)	1 『芝居万人葛』(五)(△)(江か)	1 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)
1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『女曾我兄弟鑑』(五)(〇)(八)(江)	3 『日本契情始』(五)(〇)(江)(八)	1 『商人職訓』(五)(〇)(谷)	1 『芝居万人葛』(五)(△)(江か)	1 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)
1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『女曾我兄弟鑑』(五)(〇)(八)(江)	3 『日本契情始』(五)(〇)(江)(八)	1 『商人職訓』(五)(〇)(谷)	1 『芝居万人葛』(五)(△)(江か)	1 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)
1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『女曾我兄弟鑑』(五)(〇)(八)(江)	3 『日本契情始』(五)(〇)(江)(八)	1 『商人職訓』(五)(〇)(谷)	1 『芝居万人葛』(五)(△)(江か)	1 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)
1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『女曾我兄弟鑑』(五)(〇)(八)(江)	3 『日本契情始』(五)(〇)(江)(八)	1 『商人職訓』(五)(〇)(谷)	1 『芝居万人葛』(五)(△)(江か)	1 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)
1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『女曾我兄弟鑑』(五)(〇)(八)(江)	3 『日本契情始』(五)(〇)(江)(八)	1 『商人職訓』(五)(〇)(谷)	1 『芝居万人葛』(五)(△)(江か)	1 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)
1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『女曾我兄弟鑑』(五)(〇)(八)(江)	3 『日本契情始』(五)(〇)(江)(八)	1 『商人職訓』(五)(〇)(谷)	1 『芝居万人葛』(五)(△)(江か)	1 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)
1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『女曾我兄弟鑑』(五)(〇)(八)(江)	3 『日本契情始』(五)(〇)(江)(八)	1 『商人職訓』(五)(〇)(谷)	1 『芝居万人葛』(五)(△)(江か)	1 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)
1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『女曾我兄弟鑑』(五)(〇)(八)(江)	3 『日本契情始』(五)(〇)(江)(八)	1 『商人職訓』(五)(〇)(谷)	1 『芝居万人葛』(五)(△)(江か)	1 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)
1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『女曾我兄弟鑑』(五)(〇)(八)(江)	3 『日本契情始』(五)(〇)(江)(八)	1 『商人職訓』(五)(〇)(谷)	1 『芝居万人葛』(五)(△)(江か)	1 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)
1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『女曾我兄弟鑑』(五)(〇)(八)(江)	3 『日本契情始』(五)(〇)(江)(八)	1 『商人職訓』(五)(〇)(谷)	1 『芝居万人葛』(五)(△)(江か)	1 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)
1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『女曾我兄弟鑑』(五)(〇)(八)(江)	3 『日本契情始』(五)(〇)(江)(八)	1 『商人職訓』(五)(〇)(谷)	1 『芝居万人葛』(五)(△)(江か)	1 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)
1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『女曾我兄弟鑑』(五)(〇)(八)(江)	3 『日本契情始』(五)(〇)(江)(八)	1 『商人職訓』(五)(〇)(谷)	1 『芝居万人葛』(五)(△)(江か)	1 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)
1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『女曾我兄弟鑑』(五)(〇)(八)(江)	3 『日本契情始』(五)(〇)(江)(八)	1 『商人職訓』(五)(〇)(谷)	1 『芝居万人葛』(五)(△)(江か)	1 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)
1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『女曾我兄弟鑑』(五)(〇)(八)(江)	3 『日本契情始』(五)(〇)(江)(八)	1 『商人職訓』(五)(〇)(谷)	1 『芝居万人葛』(五)(△)(江か)	1 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)
1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『女曾我兄弟鑑』(五)(〇)(八)(江)	3 『日本契情始』(五)(〇)(江)(八)	1 『商人職訓』(五)(〇)(谷)	1 『芝居万人葛』(五)(△)(江か)	1 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)
1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『女曾我兄弟鑑』(五)(〇)(八)(江)	3 『日本契情始』(五)(〇)(江)(八)	1 『商人職訓』(五)(〇)(谷)	1 『芝居万人葛』(五)(△)(江か)	1 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)
1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『女曾我兄弟鑑』(五)(〇)(八)(江)	3 『日本契情始』(五)(〇)(江)(八)	1 『商人職訓』(五)(〇)(谷)	1 『芝居万人葛』(五)(△)(江か)	1 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)
1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『女曾我兄弟鑑』(五)(〇)(八)(江)	3 『日本契情始』(五)(〇)(江)(八)	1 『商人職訓』(五)(〇)(谷)	1 『芝居万人葛』(五)(△)(江か)	1 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)
1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『女曾我兄弟鑑』(五)(〇)(八)(江)	3 『日本契情始』(五)(〇)(江)(八)	1 『商人職訓』(五)(〇)(谷)	1 『芝居万人葛』(五)(△)(江か)	1 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)
1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『女曾我兄弟鑑』(五)(〇)(八)(江)	3 『日本契情始』(五)(〇)(江)(八)	1 『商人職訓』(五)(〇)(谷)	1 『芝居万人葛』(五)(△)(江か)	1 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)
1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『女曾我兄弟鑑』(五)(〇)(八)(江)	3 『日本契情始』(五)(〇)(江)(八)	1 『商人職訓』(五)(〇)(谷)	1 『芝居万人葛』(五)(△)(江か)	1 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)
1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『女曾我兄弟鑑』(五)(〇)(八)(江)	3 『日本契情始』(五)(〇)(江)(八)	1 『商人職訓』(五)(〇)(谷)	1 『芝居万人葛』(五)(△)(江か)	1 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)
1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『女曾我兄弟鑑』(五)(〇)(八)(江)	3 『日本契情始』(五)(〇)(江)(八)	1 『商人職訓』(五)(〇)(谷)	1 『芝居万人葛』(五)(△)(江か)	1 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)
1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『女曾我兄弟鑑』(五)(〇)(八)(江)	3 『日本契情始』(五)(〇)(江)(八)	1 『商人職訓』(五)(〇)(谷)	1 『芝居万人葛』(五)(△)(江か)	1 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)
1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『女曾我兄弟鑑』(五)(〇)(八)(江)	3 『日本契情始』(五)(〇)(江)(八)	1 『商人職訓』(五)(〇)(谷)	1 『芝居万人葛』(五)(△)(江か)	1 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)
1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『女曾我兄弟鑑』(五)(〇)(八)(江)	3 『日本契情始』(五)(〇)(江)(八)	1 『商人職訓』(五)(〇)(谷)	1 『芝居万人葛』(五)(△)(江か)	1 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)
1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『女曾我兄弟鑑』(五)(〇)(八)(江)	3 『日本契情始』(五)(〇)(江)(八)	1 『商人職訓』(五)(〇)(谷)	1 『芝居万人葛』(五)(△)(江か)	1 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)
1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『女曾我兄弟鑑』(五)(〇)(八)(江)	3 『日本契情始』(五)(〇)(江)(八)	1 『商人職訓』(五)(〇)(谷)	1 『芝居万人葛』(五)(△)(江か)	1 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)
1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『女曾我兄弟鑑』(五)(〇)(八)(江)	3 『日本契情始』(五)(〇)(江)(八)	1 『商人職訓』(五)(〇)(谷)	1 『芝居万人葛』(五)(△)(江か)	1 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)
1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『女曾我兄弟鑑』(五)(〇)(八)(江)	3 『日本契情始』(五)(〇)(江)(八)	1 『商人職訓』(五)(〇)(谷)	1 『芝居万人葛』(五)(△)(江か)	1 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)
1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『女曾我兄弟鑑』(五)(〇)(八)(江)	3 『日本契情始』(五)(〇)(江)(八)	1 『商人職訓』(五)(〇)(谷)	1 『芝居万人葛』(五)(△)(江か)	1 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)
1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『女曾我兄弟鑑』(五)(〇)(八)(江)	3 『日本契情始』(五)(〇)(江)(八)	1 『商人職訓』(五)(〇)(谷)	1 『芝居万人葛』(五)(△)(江か)	1 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)
1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『女曾我兄弟鑑』(五)(〇)(八)(江)	3 『日本契情始』(五)(〇)(江)(八)	1 『商人職訓』(五)(〇)(谷)	1 『芝居万人葛』(五)(△)(江か)	1 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)
1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『女曾我兄弟鑑』(五)(〇)(八)(江)	3 『日本契情始』(五)(〇)(江)(八)	1 『商人職訓』(五)(〇)(谷)	1 『芝居万人葛』(五)(△)(江か)	1 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)
1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『女曾我兄弟鑑』(五)(〇)(八)(江)	3 『日本契情始』(五)(〇)(江)(八)	1 『商人職訓』(五)(〇)(谷)	1 『芝居万人葛』(五)(△)(江か)	1 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)
1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『女曾我兄弟鑑』(五)(〇)(八)(江)	3 『日本契情始』(五)(〇)(江)(八)	1 『商人職訓』(五)(〇)(谷)	1 『芝居万人葛』(五)(△)(江か)	1 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)
1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『女曾我兄弟鑑』(五)(〇)(八)(江)	3 『日本契情始』(五)(〇)(江)(八)	1 『商人職訓』(五)(〇)(谷)	1 『芝居万人葛』(五)(△)(江か)	1 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)
1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『女曾我兄弟鑑』(五)(〇)(八)(江)	3 『日本契情始』(五)(〇)(江)(八)	1 『商人職訓』(五)(〇)(谷)	1 『芝居万人葛』(五)(△)(江か)	1 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)
1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『女曾我兄弟鑑』(五)(〇)(八)(江)	3 『日本契情始』(五)(〇)(江)(八)	1 『商人職訓』(五)(〇)(谷)	1 『芝居万人葛』(五)(△)(江か)	1 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)
1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『女曾我兄弟鑑』(五)(〇)(八)(江)	3 『日本契情始』(五)(〇)(江)(八)	1 『商人職訓』(五)(〇)(谷)	1 『芝居万人葛』(五)(△)(江か)	1 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)
1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『女曾我兄弟鑑』(五)(〇)(八)(江)	3 『日本契情始』(五)(〇)(江)(八)	1 『商人職訓』(五)(〇)(谷)	1 『芝居万人葛』(五)(△)(江か)	1 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)
1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『女曾我兄弟鑑』(五)(〇)(八)(江)	3 『日本契情始』(五)(〇)(江)(八)	1 『商人職訓』(五)(〇)(谷)	1 『芝居万人葛』(五)(△)(江か)	1 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)
1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『女曾我兄弟鑑』(五)(〇)(八)(江)	3 『日本契情始』(五)(〇)(江)(八)	1 『商人職訓』(五)(〇)(谷)	1 『芝居万人葛』(五)(△)(江か)	1 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)
1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『女曾我兄弟鑑』(五)(〇)(八)(江)	3 『日本契情始』(五)(〇)(江)(八)	1 『商人職訓』(五)(〇)(谷)	1 『芝居万人葛』(五)(△)(江か)	1 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)
1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『女曾我兄弟鑑』(五)(〇)(八)(江)	3 『日本契情始』(五)(〇)(江)(八)	1 『商人職訓』(五)(〇)(谷)	1 『芝居万人葛』(五)(△)(江か)	1 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)
1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『女曾我兄弟鑑』(五)(〇)(八)(江)	3 『日本契情始』(五)(〇)(江)(八)	1 『商人職訓』(五)(〇)(谷)	1 『芝居万人葛』(五)(△)(江か)	1 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)
1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『女曾我兄弟鑑』(五)(〇)(八)(江)	3 『日本契情始』(五)(〇)(江)(八)	1 『商人職訓』(五)(〇)(谷)	1 『芝居万人葛』(五)(△)(江か)	1 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)
1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『女曾我兄弟鑑』(五)(〇)(八)(江)	3 『日本契情始』(五)(〇)(江)(八)	1 『商人職訓』(五)(〇)(谷)	1 『芝居万人葛』(五)(△)(江か)	1 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)
1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『女曾我兄弟鑑』(五)(〇)(八)(江)	3 『日本契情始』(五)(〇)(江)(八)	1 『商人職訓』(五)(〇)(谷)	1 『芝居万人葛』(五)(△)(江か)	1 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)
1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『女曾我兄弟鑑』(五)(〇)(八)(江)	3 『日本契情始』(五)(〇)(江)(八)	1 『商人職訓』(五)(〇)(谷)	1 『芝居万人葛』(五)(△)(江か)	1 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)
1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『女曾我兄弟鑑』(五)(〇)(八)(江)	3 『日本契情始』(五)(〇)(江)(八)	1 『商人職訓』(五)(〇)(谷)	1 『芝居万人葛』(五)(△)(江か)	1 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)
1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『女曾我兄弟鑑』(五)(〇)(八)(江)	3 『日本契情始』(五)(〇)(江)(八)	1 『商人職訓』(五)(〇)(谷)	1 『芝居万人葛』(五)(△)(江か)	1 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)
1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『女曾我兄弟鑑』(五)(〇)(八)(江)	3 『日本契情始』(五)(〇)(江)(八)	1 『商人職訓』(五)(〇)(谷)	1 『芝居万人葛』(五)(△)(江か)	1 『風流七小町』(五)(〇)(八)	1 『桜曾我女時宗』(五)(〇)(八)	9 『風流七小町』(五)(〇)(八)
1 『桜曾我女時								

御門 (吉宗)	享保 (甲辰)	(乙巳)	(丙午)	(丁未)	(戊申)	(己酉)	(庚戌)	(辛亥)	七
一七四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三
59	60	61	62	63	64	65	66	67	68
三条東河原町の叔母智治右衛門方に身を寄せる	1『安部晴明白狐玉』(五)(〇)(八)	1『出世握虎昔物語』(五)(〇)(八)	1『女將門七人化粧』(五)(〇)(八)	1『大内裏大友真鳥』(五)(〇)(八)	1『頼朝鎌倉実記』(五)(〇)(八)	1『記録曾我女黒船』(五)(〇)(八)	1『本朝会稽山』(五)(〇)(八)	1『北条時頼開分二女校』(五)(〇)(八)	1『傾白ぬり団』(三)(▲)
1『役者辰磨芸品定』(評)(〇)(八)	3『役者三友会』(評)(〇)(八)	1『役者正月詞』(評)(〇)(八)	3『役者拳相撲』(評)(〇)(八)	1『役者遊見始』(評)(〇)(八)	3『役者色紙子』(評)(〇)(八)	1『繪本答話鑑』(繪)(〇)(菊)	1『役者登志男』(評)(〇)(八)	3『役者二和校』(評)(〇)(八)	1『世話対花笠』(繪)(〇)(鶴)
1『関八州繫馬』(近松)	※3大阪大火。・11近松歿。	※10元禄大判廃止。・5白石歿。				※4米穀類の買占許可。 石田梅岩心学を唱う。 『熊坂今物語』(一風)	※6京都大火。 『史林残花』(遊戯堂主人)	※諸国に癩疹流行。・5一風歿。	※西日本飢饉。

[illegible]

(桜町 吉宗)	(桜町 家重)
(元文四 己未)	(延享元 甲子)
一七元	二
(庚申 五)	(壬戌 二)
四〇	四二
(寛保元 辛酉)	(癸亥 三)
四二	四三
(寛保元 辛酉)	(乙丑)
四二	四五
1 『御伽名題紙衣』(六)(〇)(菊)	1 (寛保四) 『其磧諸国物語』(五)(〇)(菊)
	1 『賢女心化粧』(五)(〇)(鱗)(錢)(菱)
	※刊年不明〈絵本吟草〉
1 『難波土産』(以貫)	1 鎌倉諸芸袖日記』(南嶺)
1 『武遊双級巴』	※二月二日改元。
1 『御伽空穗猿』(好話)	7 『夏祭浪花鑑』
1 『善光倭丹前』	・ 11 自笑歿
※二月二七日改元。	
1 『刈萱二面鏡』	
※7 近畿大洪水。	
5 1 『鎌倉諸芸袖日記』(南嶺)	
※二月二日改元。	
・ 二代目義太夫歿。	
7 『夏祭浪花鑑』	
※9 吉宗隠退。	

凡例

○其磧の生歿年については次の二説がある。

- (1) 寛文六(一六六六)誕生↓享保二〇(一七三五)年六月一日歿(村瀬家系譜)。
(2) 寛文七(一六六七)誕生↓元文元(一七三六)年六月歿(其磧置土産・序)。

現在のところ、どちらを正とするか決め手を欠くが、野間光辰氏の紹介された(『江島其磧とその一族』・『国語国文』・第二四卷八号・昭和三〇・一一)「村瀬家系譜」に客観的記録としての正確さを認め、ここではとりあえず(1)の説に従った。

○其磧の伝記資料は少ないのであるが、『翁草』(杜口)や『東瀾子(橋庵漫筆)』などの他、次の諸先考を参照した。

- (1) 藤井 乙男氏『浮世草子名作集』〈解題〉(講談社・評釈江戸文学叢書)
(2) 水谷 不倒氏『新撰列伝体小説史・前編』(春陽堂)

- (3) 野間 光辰氏「大仏餅米山書」(『国語国文』・昭和三〇・八)
「江島其碩とその一族」(先掲)
- (4) 中村 幸彦氏「自笑其碩確執時代」(桜楓社・『近世小説史の研究』所収)
長谷川 強氏「其碩・自笑確執前後」(『国語国文』・昭二七・一〇〇)
「其碩・一風・団水」(『近世文芸』第四号・昭三一・三三)
『浮世草子の研究』(桜楓社)
- 其碩の著書については次の諸先考を参照した。
- (1) 野間 光辰氏「浮世草子年表」(『国語国文』・昭和二九年・一・三・七・九)
- (2) 中村 幸彦氏(先掲書)
- (3) 石川潤二郎氏「江島屋其碩浄瑠璃著作考」(『国文学研究』第二二号・昭和三〇・八)
- (4) 長谷川 強氏「八文字屋本年表」(守随博士還暦記念『近世国文学―研究と資料―』)
「浮世草子年表(宝永元年以降)」(『浮世草子の研究』所収)
- (5) 山崎 麓氏「改訂日本小説書目年表」(ゆまに書房)
- なお、役者評判記などの著作は、必ずしも其碩のものと断定出来るわけではないが、『国書総目録(著者別索引)』への登録状況を参考にして掲げておいた。その際『歌舞伎評判記集成』(岩波書店)を参照した。
- 其碩作と断定仕難いものは、△▽で示した。因みに次の記号を用いて、年譜における信頼度を区別した(その際、長谷川強氏「浮世草子年表」における記録を参照した)。なお、出版書肆名・ジャンルなどは略号で示した。(八)▽八文字屋。(絵)▽絵本。(狂)▽絵入狂言本。(評)▽役者評判記。などである。
- (1) ○ 原本に其碩の署名(又はそれに準ずるもの)があり、刊行年の明らかなもの。
△ はあるが、刊行年は推定によったもの。
● はないが、刊行年の明らかなもの。
▲ もなく、刊行年も推定によったもの。